

# 職場は地球

道路、トンネル、橋、堤防、ダム……。当たり前のように存在するもの向こうには必ず人の営みがある。日常生活を支える職人たちの現場と軌跡を追う。

## 堤防を築き、道路の高さを上げて 台風による洪水の災害対策を図る

- ①R1 那土 那賀川・小川橋工区他  
那賀・和食 道路工事(16)
- ②R1 那土 那賀川・南川上流工区  
那賀・和食 道路工事(23)
- ③R1 那土 那賀川・小川橋工区  
那賀・和食 河川工事(25)

那賀川の中流域に位置する那賀町の和食・土佐地区。近年の台風の影響で度重なる大規模な洪水が発生している。特に平成26年、台風11号に伴う洪水では、和食水位観測所において、はん濫危険水位を大幅に超える水位(1・P54・1m)を記録。床上、床下併せて279戸もの浸水被害が発生した。このため、平成27年より「那賀川 床上浸水対策特別緊急事業」を進めている。中山川と南川上流に、平成26年の台風11号の「痕跡水位54・2m」を防ぐ高さの堤防を整備。道路と橋の高さを上げることで水害の防止を図る。さらに、将来的により高い堤防へと段階的に整備していく予定だ。

現在、土木会社5社がエリアを分割して作業に当たっている。小川橋周辺の道路と河川の工事を担っているのが那賀町に本社を構える広瀬組だ。国道195号線より南、南川沿いの道路の高さを上げるため、すぐそばに仮設道路を建設。新しく道路ができる場所では最終の盛土を施工中だ。それに伴い、国道195号線では2回目の国道交差点の切替作業が完了。「国道交差点の切替作業は全部で3回必要で、交通安全対策が最も重要な要素となる工事です。通勤車両はもとより、徒歩で通学する小学生や自転車通学の中学生への安全配慮が欠かせません。バリエーションの適切な配置は、通行され

る方の視線で毎日始業前と終業後に点検を行います。小学生の通学時には誘導員を配置しての見守りも実施しています」と代表取締役の広瀬芳弘さん。

盛土工はICT情報化施工を採用。ドローンによる測量、点群処理、データ作成、機械へのデータ入力、施工まで全ての作業を広瀬組が自社で行っている。盛土の上では、黄色いバックホウが作業をしている。機械に平面図、縦断面図、横断面図を読み込ませ、指示される数値をオペレーターがチェックしながらミリ単位で土を動かす繊細な操縦をしている。タイヤローラーでは、何

回にわたって転圧したかを機械が計測。回数ごとに色分けされ、転圧回数が目瞭然となる。ICTが導入されるまでは、土の締め固め状況を把握するために500立方メートルもしくは1000立方メートルごとに穴を掘り、土の質量や砂の量から土の密度を求め「砂置換法」と呼ばれる試験を実施していたが、今ではこの作業が最初の1回のみに。ICTを導入することであらゆる面で効率よく工事が進むようになった。盛土の完成後は道路の整備を行い、新小川橋の供用開始に向けて工程を進めていく。



平成31年4月ごろの現場の様子。



令和2年8月ごろの現場の様子。手前に小川橋、奥に南川橋が完成している。盛土は、水が流れやすいように傾斜をつけた水勾配になっている。



モニターを確認しながら、バックホウを操縦する入社15年目の岩川友彦さん(35)。



岩川さんが見ているモニター。マイナスなのでもう少し土を盛る必要がある。



工事場所…那賀町和食郷  
工期…①令和1年11月28日～  
令和2年11月11日  
②令和2年5月2日～  
令和3年2月20日  
③令和2年5月2日～  
令和3年3月7日



入社7年目の呉羽光太さん(25・阿南市出身)。小川橋工区他道路工事の施工管理(現場監督)をしている。「道路や堤防など、ずっと残っていくものを作る仕事にやりがいを感じています!」。



広瀬組のみなさん。